

2021年8月8日 聖霊降臨節第12主日礼拝

メッセージ「平和の祈り」

牛田匡牧師

聖書 使徒言行録 20章 17-35節

一昨日8月6日は、76回目の広島平和記念式典がありました。明日8月9日には長崎の平和記念式典が行われます。先週の8月第一日曜日は「平和聖日」と定められていますし、この8月は毎年、私たちに「平和」について改めて考えさせてくれる時となっています。

先ほど歌いました『讚美歌21』499番「平和の道具と」は、先週も歌いましたが、平和を求める祈りの賛美歌です。

平和の道具と ならせてください

憎しみに愛を、戦に和解を
分裂に一致、疑いに信仰、
誤りに真理、絶望に希望、
暗闇に光、涙に喜び

もたらず器と ならせてください。

なぐさめを求めず なぐめることを、
理解されるより 理解することを
愛されるよりも 愛する心を、
敵をもゆるして ゆるされることを。
自分のいのちを 献げて死ぬなら、
永遠のいのちに いきるものとなる。

この元々のお祈りの歌詞は、「アシジ

のフランシスコの平和の祈り」と呼ばれていますが、実際には12世紀から13世紀に生きたカトリックの修道士であるアシジのフランシスコの作ではなく、恐らく19世紀の末か20世紀の初めに創られた作者不明のお祈りなのだそうです。第一次世界大戦と第二次世界大戦を経て、世界中の教会で平和を求める祈りがさげられた時に、このお祈りはいつしか「アシジのフランシスコの平和の祈り」として様々な言葉に翻訳されて、世界中に広がって行きました。そこにはフランシスコから始まった修道会、フランシスコ会の働きもあったわけですが、深く大自然を愛し、清貧を旨としたフランシスコらしいお祈りとして、世界中の人々に覚えられていたのだと考えられています(木村晶子2008「アシジの聖フランシスコの『平和の祈り』の由来」『人間生活学研究』第15号)。



自然を愛し、鳥たちに説教したと伝えられている

アシジのフランシスコ

(レーベンス・シュレーにあるメダルの写真)

このお祈りの根底には、自分が人から受け、与えられるよりも、自分から人に与えられるように、自分を変えて下さい、という姿勢があります。しかし、実際には「与えること」と「与えられること」、どちらが嬉しいことであり、楽しいことでしょうか。例えば、子どもたちにお菓子を分ける場面を考えて見ても、答えは明確です。隣の子がもらえて、自分がもらえなかったりすると、「ずるい」となります。それこそ「この前、もらえなかったんだから、今度はもっと沢山もらって当然でしょ」となったりもします。自分の持っているものを人にあげるとするのは、子どもに限らず、大人にも難しいこと、いや、それこそ実は大人の方こそ、なかなかできないことなのかもしれません。

今回の聖書の言葉、「使徒言行録」20 章 35 節には、そのことを端的に表した言葉がありました。「『受けるよりは与えるほうが幸いである』と主イエスご自身が言われていた」とパウロが伝えている言葉です。しかし、この言葉はイエス様と弟子たちの言動が記されている 4 つの福音書の中には登場せず、聖書の中ではここだけにしか記されていません。しかも、パウロは他の使徒たちとは異なって、十字架につけられる前のイエス様とは行動を共にしていません。彼は十字架で処刑された後に、死から引き起こされたイエス様と、ダマスコへ向かう途上で、光の中で出会ったと言われています。ですから、この「受けるよりは与えるほうが幸いである」という言葉は、彼が直接イエス様の口から聞いた言葉なのではなく、当時の教会の中で、人々の口から口へと語り伝えられていた言葉だったのかもしれない。

確かに、イエス様の生涯を思い返しますと、「人々に様々なものを与え尽くした上で、最後には自分自身の命をも犠牲にされた」ということで、この言葉はイエス様の生き様を表わしている、と思えるかもしれません。しかし、これに似た「受けるよりは与える方が喜ばしい」という言葉が、イエス様よりも更に古い紀元前 4 世紀頃の古代ギリシャの歴史書(トゥキディデス『戦史』II 97:4)の中にもあることが分かっています。ですから、恐らくこの言葉はイエス様が直接言われた言葉ではなかったのでしょう。

そもそも人に「与える」ためには、まず自分が人に与えられるだけの何かを持っていなければなりません。しかし、ガリラヤ地方の貧しい農民たちと共に、歴史の中を生きられたイエス様は、そのように人に与えられるだけの何かを、持ってはいませんでした。古代ギリシャの軍人や貴族など、知識階級の人であれば、自分が豊かに持っているものの一部を、持っていない人に与えることはわけもなく、「受けるよりは与える方が喜ばしい」と言えたかもしれませんが、イエス様たちにはそんな余裕はありませんでした。仕事がなく、お金がなく、その日の食べ物にも着る物にも事欠くような生活の中で、それでも諦めずに願い求め続けること、そこに神様が共に

おられて、働かれることを、イエス様はその言葉と振る舞いを通して、伝えられました。釜ヶ崎の本田哲郎神父はこの 35 節の言葉を「受けるより、受けたものを分かち合うことのほうに、神からの力が働く」と訳されています。

自分が特別に、人に与えられるだけの十分なもの、余分を持っているわけではありません。自分も決して十分には持っていないけれども、それでも自分が今持っているもの、自分が受けたものを隣の人と分かち合う中に、神様からの力が働く…。それは、「自分が持っているものを人にあげて、感謝してもらえて自分も嬉しい」というのとは、随分と違っているのではないのでしょうか。

今回の聖書のお話は、パウロがエルサレムに向かって出発する前に、エフェソの長老たちに別れを告げたという場面でした。パウロはミレトスの町にいたそうですが、そこから使いをやって、エフェソの長老たちにわざわざ来てもらったそうです。直線距離で 50 キロ、途中で河もあるそうですが、なかなか大ごとです。しかし、パウロにとっては、もうこれが最後になるだろうということで、お互いに覚悟を持っての対面だったのでしょう。そしてこれまでの歩みを振り返りつつ、忠告と励ましを伝え、最後にパウロ自身が身をもって示して来たこと、即ち労働と分かち合いを通して神様の力が働くということ、を、伝えています。

私たちの教会では、毎月釜ヶ崎へおにぎりを作って届け、いこい食堂の方と一緒に四角公園で集まって来られる方々にお渡ししています。いこい食堂ではその他の日にも様々な教会や団体や個人の方々が、お弁当作りや夜回りなどをされていますが、私たちにできることとして、おにぎり作りを続けさせて頂いています。しかし、それは私たちが十分に持っていて、あり余っているから行っているわけではありません。公園では何十人もの方が列になって、おにぎりを受け取られます。「すまん」「おおきに」「ありがとう」などと言われる人もいれば、何も言われずに受け取られる方もおられます。その方々におにぎりをお渡ししながら、それしかできていないことに、これでいいのだろうか、という思いが無くなることはありません。たとえ、一時の空腹を満たせたとしても、仕事や収入が無ければ生活の根本的な改善には結びついてはいかないからです。

私たちにできることは本当に小さく、できないことの方がほとんどです。しかし、そのできない自分、持っていない自分、弱い自分を認める所からしか何も始まらないのだと思います。人に与えられるだけの十分なものが、自分にあるわけではありません。世界を平和にしていくための何かを持っているわけではありません。私たちは何か特別なものを持っているからできるのではなく、たとえわずかであっても、今

受けているものを、互いに分かち合うことで、平和は造られていくのではないでしょう
うか。

ニュースによると、毎日、新型コロナの感染者数は増加の一途をたどり、過去最
多、記録を更新しています。このままでは東京都では一日に新規感染者が1万人
になるだろうとも予想されています。重症患者を受け入れられる病院はすでにパン
クしており、「自宅療養」という名目で受け入れが拒否される事態になっています。
その一方で、連日、東京オリンピックにおける日本人選手の活躍、メダル獲得が
大々的に報じられています。事前の入国も、現地での練習も、大会開催中の練習
や移動、宿泊地と会場の制限など、これまでの大会とは比べものにならない程に、
外国人選手たちにとっては圧倒的に不利な状況、不平等な条件下での開催です。
このオリンピックは今日で閉会するそうですが、この開催のために何兆円もの税金
が投じられ、国民全員から何万円ものお金が抜き取られ、何千人もの医師や看護
師たち医療関係者もオリンピックに動員されています。もしもそれだけの人もお金
もコロナ対策に回されていたら、どれだけの人が助けられたでしょうか。世界一
流の選手たちによる競技をテレビで観戦して「感動した」と言うのは簡単ですが、
その裏には、多額のお金を動かすスポンサーがあり、チームメイトや応援団に対して、
「金メダルが取れずに申し訳ない」「応援してくれたのに期待に答えられず、すみ
ません」と言わずにはいられないプレッシャーがかけていることを思うと、この
スポーツイベントが如何に人の心も生活もゆがめているかと思わされます。

「国民の命と生活を守る」という言葉とは裏腹に、全ての人の命を軽んじる施策
ばかりが行われています。十分な人とお金と時間があれば、平和が造られるので
はありません。口では「平和な世界を」と言いながら、核兵器を造り続けている世
界です。日本は世界で唯一の原爆被爆国でありながらも、未だに核兵器禁止条
約に批准しようとしません。この地球を破壊し、人類の生存を不可能にするよう
な核兵器や原子力発電所を何百、何千、何万と保有しながら、日々の幸せを求め
ている現代人たちのことを、さながら断頭台の上でパーティーをしているようだ
と評した人がいました。その刃はいつ自分たちの上に落ちて来てもおかしくないに
もかわらず、その事実には目を向けず、とりあえずは見なかったことにされてい
る…。この世界はそんな狂った世界です。

この狂った世界の中で、私たちは今日も「生きよ」と命を与えられています。何の
力があるわけでもない。誰かに何かを与えられるわけでもない。けれども、そんな
私たちでも平和を実現するために用いられていきたいと願っています。神様が共
に働いて下さることを信じて、私たちは今日も平和の祈りを心から捧げていきます。